MESSAGES
メッセージ

ことばへの配慮

外国語学部長　渡部　重美

WATANABE Shigemi
慶應義塾大学（文学修士）

■専　　門
18～19世紀の
ドイツ文学・思想

■担当科目
ドイツ語圏文学・思想概論、
応用ドイツ語　ほか

遠隔ライブ授業を始めた昨年度春学期、端末の画面に向かって話をしているうちに、ふと虚空に向かってしゃべり続けているような気分になって、その瞬間に頭の中が真っ白になり、話そうと思っていたことがすっかり飛んでしまったことが何度かありました。自分の話すことばの向かって行く先が曖昧になり、どこに届いているのかわからないことばを発し続けることが急に不安になり、最後はことばを失ってしまったわけです。

似たような体験をなさった先生方が他にもいらっしゃるでしょうし、恐らく、授業を受けている学生のみなさんも、自分の発言がうまく伝わっているのかどうか心配になったり、そもそも、自分が授業に参加していること自体が先生の方できちんと把握されているのかどうか気になったりした方がいるのではないでしょうか。

＊　＊　＊

コロナ禍で授業や会議などが遠隔で行われる中、「ことば」の問題が非常に先鋭化された形で顕在化してきているように思えます。例えば、対面であれば何気ないひと言、たわいのないひと言で済んだものが、遠隔だと妙に冷たく、辛辣に響いて人を傷つけたり傷つけられたりして、その場がギスギスした雰囲気になったりするのは、恐らく、メールやＳＮＳでやり取りをしているうちに交わされることばが次第に厳しく、容赦ないものになるのと原理的に同じことではないかと思います。

対面と遠隔の一番大きな違いは、人と人との間に端末が介在する点です。最近ではＺｏｏｍなどの機能も向上して使いやすくなってはいますが、ビデオをオンにした状態であっても、相手の表情の微妙な変化、視線の向かう先、相手の呼吸や、場合によっては貧乏ゆすりなどの身体的状況に関する情報はほとんど入ってきません。あるいは、見極めるのがとても難しい。対面の場合には、このようなことば以外の情報が私たちのコミュニケーションを補い、支えてくれます。遠隔の場合は、少々大げさな言い方をすれば、ことばだけがコミュニケーションの唯一の拠りどころなのです。この拠りどころがうまく機能しないと、私たちは深刻なコミュニケーション障害に陥るのでしょう。したがって、遠隔の場合は、対面のとき以上にことばへの配慮が必要となるわけです。

＊　＊　＊

ことばへの配慮は、ことばを交わす相手に対する配慮、相手に寄り添う気持ちや態度と結びついてくるはずです。ことばにはもともと、一般化して表現する性質があります。Ａさんのたとえようのない苦しさも、これを「苦しい」と一般的なことばで表現しなければ人には伝わりません。ですが、「苦しい」と言った瞬間に、Ａさんが抱える苦しさの「たとえようのなさ」、つまり個別性・特殊性はそぎ落とされてしまいます。対面であれば、ことば以外の情報によってＡさんの苦しさの個別性・特殊性をある程度察してあげることも可能でしょうが、遠隔の場合には、「苦しい」ということばの背景にあるＡさん固有の事情を対面のとき以上に想像し、配慮してあげる必要があるでしょう。もちろん、これは容易なことではありません。

＊　＊　＊

「２０２１年度　学長メッセージ」の中で、コロナ禍の先に学生のみなさんが目指して行く社会は思いやりにあふれているはずだ、と山路学長が書いていらっしゃいます（『獨協大学ニュース』２０２１年５月号、３ページ参照）。この学長のことばはとても印象深く、私の心に刻み込まれました。コロナ後の世界はコロナ前とは大いに異なった世界になるでしょうが、この間の経験を生かし、ことばへの配慮を忘れず、ことばを交わす相手に寄り添う気持ちを持つことによって、思いやりにあふれた優しい社会の実現が可能になるのではないかと私も考えています。

DEANS'
学部長

第30回

新型コロナウイルス感染症がもたらした世界の分断
～学問の可能性～

法学部長　鈴木 淳一

SUZUKI　Junichi
筑波大学（法学修士）

■専　　門
国際法（国際公法）

■担当科目
国際法
国際人道法
国際組織法

はじめに

新型コロナウイルス感染症（「新型コロナ」）は世界を席巻しています。2020年1月に世界保健機関（WHO）の緊急委員会は「公衆保健上の緊急事態（PHEIC）」であると宣言し、3月にはWHO事務局長のテドロス氏も、地球規模の感染拡大を意味する「パンデミック」であることを認めました。来年の1月で発生からほぼ2年経過することになりますが、人類は新型コロナの影響下にまだあることが予想されます。

従来の感染症とは異なり、新型コロナは私たちの生活を世界規模で一変させてしまいました。では新型コロナが世界に拡大し、国際社会がこれを阻止できなかった理由はなんでしょうか。

パンデミックを予測していた国際社会

感染症対応では、見えない全体像を探り、未来に生ずるであろう事象を予測しながら、あらかじめ準備をしておくことが大切です。国際社会もWHOを通じて来るべきパンデミックに備えてきました。特に2005年に改正された国際保健規則は、感染症に対処するために世界の全ての国家が共通の対応能力を獲得して、もし危険な感染症が発生したらWHOを中心として国際社会全体で対応するような仕組みを構築しました。新型インフルエンザ（A／H1N1）、エボラ出血熱、ジカ熱への対応では、多くの感染者・犠牲者を出しながらも、世界は封じ込めに成功してきました。

新型コロナでの失敗

しかし新型コロナは私たちの準備を嘲笑うかのように、感染症対応の網の目をすり抜けて行きました。私たちが気づいたときには、新型コロナは世界中に蔓延しており、医療が整備されて準備が十分にできているはずの先進国ですら瞬く間に感染が広がりました。

従来の感染症対策は、感染者の症状を基準として、感染者と非感染者を区別することを前提としていました。新型コロナは、たとえ感染しても症状がでなかったり軽症であったりするため、感染者と非感染者の区別が困難である特徴を有しています。新型コロナの感染拡大の初期段階では、早期発見・隔離というこれまでの方法によっては、感染拡大を完全に阻止することはできませんでした。

対応に苦慮する世界

新型コロナの厄介な点は、年齢や基礎疾患の有無によって症状や重篤化のリスクが異なる点でした。感染症のリスクは個人や集団の属性によって異なりますから、社会全体に同じ行動を求めることが難しくなってしまいます。また対策の切り札であると考えられるワクチンを世界に供給するために、国連を通じてCOVAXという枠組みができましたが、世界のすべての人々にワクチンを届けることは難しく、世界の格差や不平等・貧困といった課題が繰り返し指摘されました。感染症対策によって世界の分断が意識されることは悲しい現実です。

いままでのところ国際社会が一丸となって新型コロナに対応することができていません。新型コロナに対抗し、将来のパンデミックを予防するために、WHOの会合が今年の11月に臨時で開催されます。そこでは、今回の新型コロナ対応の反省を踏まえて、新しい仕組みについて検討される予定です。新型コロナへの対応で後手に回ったと批判されるWHOの（そして世界の）名誉挽回となるのか注目されます。

人類としての連帯と学問の可能性

新型コロナで分断され断片化された世界では、宗教やイデオロギーを巡る従来から存在していた対立だけではなく、SNSなどの新しい技術を通じた人々の間の分断が顕著となってしまいました。個人が所属している個々の世界とは異なる世界を「嘘（フェイク）」として否定したり攻撃したりする例もみられるようになっています。

私たちは、他人を理解し人類として連帯する勇気を持たねばなりません。大学で学ぶ学問は他人を理解するためのヒントを私たちに授けてくれることでしょう。言葉や文化を学ぶことを通じてこれまで接したことのない別の世界を理解し、経済学や法学の勉強を通じて新型コロナによって分断された世界を再び統合する方法を見つけることができたら素敵なことですね。

人類が英知を結集して、新型コロナによって分断された世界を再統合し、新しい世界像を提示し実現できることに期待したいと思います。